

公開講演

環境ホルモン問題の新しい対応：未来世代のための予防医学

森 千里

千葉大学大学院 医学研究院 環境生命医学

現在、私たちは、数え切れないほどの化学物質に取り囲まれて日々生活している。従来から化学物質の人体汚染は、科学技術の進歩につれて水面下で進行しているのではと危惧する声も多い。また、最近の知見として、我々が曝露されている化学物質には微量で生体内のホルモン作用を乱し悪影響を引き起こすものもあることが判明し、内分泌攪乱物質（環境ホルモン）問題が注目を浴びた。この問題において人への影響として特に懸念されたのが、胎児期や新生児・乳幼児期曝露による影響である¹⁾。この背景には、胎児や乳幼児は、大人に比し化学物質に対して感受性が高いということが近年の研究で報告され、High risk life-stage の存在が広く認知されたことである²⁾。

一方、過去数十年でアレルギーを持つ児童が急増し、現在では小学生の 35%がなんらかのアレルギーを発症している。早い子供では生まれて半年ほどでアトピー性皮膚炎を発症する。病気の要因には、遺伝的な背景と環境的な背景の二つがあり、わずか数十年で遺伝的な背景が変わることは考えられないので、なんらかの環境的な要因が過去数十年で変化していると考えられる。この、環境的な要因のうち何割かに、人工的な化学物質汚染が関わっているのではないかと、私たちはそう考え、胎児期の複合的な汚染にその原因を探ってきた^{1,3)}。

本講演では、これまでの我々が行ってきた日本人胎児の複合汚染状況調査から、その対策として始めた次世代環境健康学プロジェクト⁴⁾とNPO次世代環境健康学センターの活動内容（化学物質の健康診断プロジェクト、環境健康学トランスレーター事業、そして環境改善型予防医学の実証実験を目的とした“未来世代のための街づくり：ケミレストウン・プロジェクトと環境医学診療科の開設”）について概説する。

最近、「バリアフリー」という言葉に代わって、「ユニバーサルデザイン」という言葉が聞かれるようになってきた。事故や病気、または高齢化などによって身体が不自由になってから施設をリフォームしたり障害に合わせた商品を買ったりするのではなく、最初から健常者も障害者も使いやすいデザインを導入するという概念である。21世紀のモノづくりや環境デザインにおいても、人のライフステージの中でもっとも感受性の高い胎児期にあわせたユニバーサルデザインにすることで、現世代のすべての人、そして未来の世代の人にとっても健全な社会が可能になるのではないだろうか⁵⁾。NPO次世代環境健康学センターが胎児を基準にした環境予防医学の重要性を世界に広める拠点になればと思っている。

参考文献

- (1) 森 千里：胎児の複合汚染，中央公論新社、2002.
- (2) Mori C：Reprod Med Biol 3, 51-58, 2004
- (3) Mori C et al.：Environ Health Persp 111, 803-809, 2003.
- (4) 森 千里：胎児の複合汚染状況の情報開示と次世代環境健康学の創成について。産婦人科の実際 52, 2363-2371, 2003
- (5) 森 千里：未来世代のために、環境新聞社、2004